印度歴遊

一九七八年八月～一九八〇年八月

宮下晴輝

印度ラジャスタン州の大半は砂漠である。デリーの西南二百キロの地点にラドゥヌン（Ladnun）という町があった。八月の末は、雨期もようやく峠をこしたころである。馬車は、石畳に蹄を立て鈴を鳴らし、早朝の街角を走った。尖塔におおいかぶさるように長い尾を垂らす鳥の影。大きなシェルターに民を庇うビーブルの木。種々の原色で彩られた石壁。罐をもち道端に蹲る人。草原に立つ女。犬を追い払う者。それに野良牛。

爽やかであるがどこか異様な空気をもつ街を十分ばかり走り街並のきれたところ、果しなく広がるタール砂漠を背後に、目指す研究所があった。広大な敷地の中まばらに数個の建造物がみえる。どこかの牧場を想わせる。『JAIN VISHVA BHĀRATĪ』とうたった看板のある門をくぐる。一年後にここを去った時には、すさまじい砂嵐に倒壊し、この門は取り払われていた。

馬車は最初の建物の前に止り、Dr. N. Tatia と共に先ずは表敬訪問に降り立った。大理石のホール。無造作に白布を纏い、白いプラスチックの板で口元を覆ったジャイナ僧が座っていた。タティア先生は跪きすり寄って僧の足下にまで頭を寄せさしのべた手をそのまま頭におしいただくこと数度。印度の深奥にまで飛びこんだのだと察知した私はただその場に立ちつくしていた。

ここはジャイナ教テーラパンタ派の僧院だった。孔雀が数羽徘徊し、遠く切り出された石板を構築中の建物へと駱駝が運ぶ。野羊や牛を追って砂丘にわずかへばりつく草を求めて出かけていく少年たち。日暮には、それらを追って、頭上に山のような柴を積み家路に急ぐ婦人たちが見られた。砂漠とはいえ大地のやさしさがまだいくぶんかあった。

僧院の横には、トタン板の大きな屋根で日射しをさえぎっただけの説教場があった。毎日曜早朝、長老格のジャイナ僧が壇上より説いた。この地方の言葉はマールワリーと呼ばれ、ヒンディ語と語彙をほぼ等しくするが、動詞部の語尾が多少違っているようである。後方に college が建設中であった。翌年完成したときに町の少女十数名が入学したが、二メートルほどもある石板で建物は囲われてしまった。その右方五百メートル、草はらを越えて guest house があり、ここに一室が与えられることとなった。その他、タティア先生の office もおかれている図書館、建物の内部がいくつもの小さい僧房で仕切られている yoga 道場があった。時おり印度各地にいるジャイナ教徒たちが集まって yoga の修練にやってきた。

「JAIN VISHVA BHĀRATĪ」とは「ジャイナの普遍語」というほどの意味か。この名のもとに、パンフレット・説教集の類からジャイナ典籍の校訂テキストにいたる数々のものが出版

されている。ところがその任に当るはずの研究陣容はこのラドゥヌンには皆無といってよかった。タティア先生も、ジャイナ教百科辞典の編纂を依頼されていたが、彼を補佐する研究者もなく、孤軍奮闘のようすだった。

ベナレスでのことである。毎朝牛乳を買いにいくのも日課の一つ。搾りおえるのを待っている数人の中に一人の老紳士がいた。たまたま佛教に話し及ぶと、

yaḥ sarvathā-sarva-hatâṇḍhakāraḥ
saṁsāra-paṅkāj jagad ujjahāra |
tasmai namas-kṛtya yathârtha-śāstre
śāstraṁ pravakṣyāmy abhidharmakośam ||

という倶舎論冒頭の第一偈が彼の口をついて出た。ベナレスには小さな出版社がいくつもあるが、そこから種々の校訂テキストを矢継早に出している Ācārya S. D. Shastri 氏の編集になる倶舎論テキストがすぐ売り切れてしまうのも、それへの関心の高さを示している。

私が印度を訪れたのも、タティア先生とともに倶舎論の英訳を作るためであった。仕事は難航して遂に完うせずに帰国するという結末となったものの、記憶に残ることを一、二記しておく。

第六章賢聖品より始めた。テキストの再校訂を私が担当し、それにタティア先生が訳文をつけ、討議改良するという次第で進めた。サンスクリットの論書でしばしば用いられる句に、"evaṁ gatam, idaṁ tu vaktavyam." というのがある。「以上のように了解されるが、さらに次のことが論述されねばならない」という意味で、ある項目を論じ終り別項に移る場合、ごく普通に用いられる言葉である。ただテキストを項目に句切って編集しなおすとなると、この句を前項の後尾につけるとよいのか、後項の出だしにつけて読むとよいのかと、気になることがある。因に、漢訳ではたいてい後項の出だしとして訳されるが、チベット訳では "evaṁ gatam" によって前項が終了し、"idaṁ tu vaktavyam" より後項が始まっている。一体印度人自身はどんな語感をもってこれを読むのだろうか。タティア先生にたずねてみた。彼は次のようにこたえてくれた。『君のすきなように句切ったらよい。ただそれがテキストの編者の論理性を表わすことになるけれど』、と。

念処(smṛty-upasthāna) の本体を論ずるところで、慧(prajñā) と念(smṛti) の関係を次のように喩えている。

dāru-pāṭana-kīla-saṁdhāraṇavat. (ABh, Pradhan's ed. VI 15b p. 342, 9)

ちょうど木を裂くときに楔の力をもちいるように、慧によって法を弁別するとき念の力をもちいる、という意味である。ところがここで問題なのは、「楔」と訳した "kīla" である。一体印度ではどうやって木を切るのだろうか。砂漠でそんな光景はお目にかかれないが、幸いなことにタティア先生はナーランダで何度も目撃していた。玄奘三蔵とてきっとそうであったに違いない。木材をくぎのようなもので動かぬように固定して二人

向い合って挽くのだそうである。Yaśomitra の注釈の中に、「念が対象をしっかり支えているときに、慧が識別する」という一文があり、ナーランダの光景と符合するのである。さらにまた現代語で“kīl”と言えば一般に、柱にものをひっかけるときにつかうくぎを指すようである。議論の末に、たとえ両漢訳が「楔」と訳していても印度にかかる概念は存在しないのではないか、という結論にいたろうとした。

しかしながら、慧を斧ではなく鋸に喩えるのにはいささか抵抗を感ずるし、印度に「楔」の概念がないわけではない。例えば、Hitopadeśa の中に、“kīla”を引き抜いて死んだ猿の話がある。ここでは鋸が使われているのだけれど、ある大工が半ばまで切った杭の割れ目に“kīla”をさしはさんで休みをとっていた。たまたま遊びにきた猿がその“kīla”を両手でつかみ、杭の上に飛びのりすわった。すると彼の下部にある“muṣka-dvaya”が間にはさまってしまい、あわててその“kīla”を引き抜いたところ、彼のその部分がつぶれて死んだ、というものである。これは「楔」というべきでなかろうか。

さて次に“kṣānti”(忍)について一言しよう。この“kṣānti”は、“jñāna”(智)“dṛṣṭi”(見)と共に、法の弁別(dharma-pravicaya)という機能をもつ“prajñā”(慧)をその本性としている。その場合、“jñāna”は“niścaya”(assertainment)であり、“dṛṣṭi”は“santīraṇa”(judgment, reflection)、“kṣānti”は“kṣamaṇa”(permitting)である、というように機能上の意味が与えられている。ところで、Yaśomitra はこの“kṣānti”について“kṣamate rocate”という注釈をつけている(Vyākhyā, Wogiwara's ed., p. 533, 4)。“rocate”の一般的意味は「喜ぶ」「好む」である。このことより、“kṣānti”にしばしば“patience”という消極的な意味をもつ訳語が与えられてきたけれども、むしろ積極的あるいは自発的な訳例、例えば“willing obedience”とか“willing acceptance”といったような訳が与えられねばならないであろう、と提案されたことがある(cf. Dr. G. H. Sasaki, Journal of Indian and Buddhist Studies, vol. VII. 1)。そういった事情もあってか Edgerton も彼の辞書のなかで“intellectual receptivity”という、厳密に言えば意味をなさないような定義を与えている。それはともかくも“willing acceptance”という言葉は示唆的である。しかしながらこれは“kṣamate”と“rocate”の二つの語感を加算したにすぎない。kṣamate=rocate と注釈する Yaśomitra の真意をもう少し明確に知ることはできないであろうか。そのためには次の俱舎論中の一例がよき手立になるであろう。

yat svayaiṁ yukty-anumānato rucitaiṁ tan matam.

(ABh, Pradhan's ed. p. 246, 3)

(正しい推理によって自ら容認されたものそれが菅である。)

これは「見聞覚知」の覚を定義している一文である。ここでは、√ruc の「喜ぶ」という意味を捨てて、「容認する」という意味を採用しなければならない。また Yaśomitra もこの“rucitam”を“abhipretam”(approved, accepted)と解している(Vyākhyā p. 407, 19)。従って先の kṣamate=rocate が意味す

るところは、“kṣānti”を単に“approval”“acceptance”という意味で読むべきことを教えているにすぎず、“kṣānti”の「自発性」という問題を、興味深いのだけれど、直接指示しているのではないことが判る。

タティア先生は、“kṣānti”の「自発性」という点を強調して、それを“approval, acceptance, reception”等と訳すことをできるだけ避けようとした。彼が先ず選んだのは“interest”であった。後に改めて、“convincement”とした。(“conviction”としなかったのは、それを“adhimokṣa”に当てていたからである。)

＊　＊　＊

一年余り砂漠のラドゥヌンに住んで、私はタティア先生とベナレスで再会し仕事を続けることを約束して、翌十月、一足先にベナレスに移った。

前年の大洪水につづいてその年は大旱魃だった。それに石油事情の悪化と機関部の老廃とが重って、電力供給は最悪となりそのため水道事情も劣悪なものとなっていた。物価は上昇する一方で、時に突如街からタバコが消えたり砂糖が消えたりした。砂糖は一年余りで三倍にも価格がつり上げられた。アグラの近辺で列車が襲われ一車輛が切り離されてそっくり支線に引き込まれ金品が掠奪された。三十数名の dacoit による仕業である。ビハールでは、バスが襲われ、村が掠奪された。首都デリーでの誘拐事件や淑女からのひったくり事件は一面トップで数日報道されるのに比して、dacoit の記事は、報道管制のせいか、あまりにもささやかに取り扱われていた。dacoitに土地を与えて矯正の道を歩ませようとしたプラカーシュ・ナラヤン氏も、インディラ・ガンディー女史を政権の座から追って三年、再び彼女の強権復活を待望する声を聞きつつ病死。翌八十年一月、彼女は圧倒して勝利し再び首相の座についた。しかし一向に砂糖の値は下らなかった。

約束の二ヶ月を過ぎても現われないタティア先生を待ちながら、サンスクリット大学やベナレス・ヒンドゥー大学に足を運んだ。ベナレスにて短期間で学べるものは多くないことを痛感した。せめてヒンディー、よくを言えばサンスクリットで充分会話できるのであれば、幾多の知識の集成者たちから親しく聞くことができたであろう。それでも少ない伝手をたのんでいろいろな学者をたずねたが、種々のテキストを無批判に読んだ、ということにすぎなかった。そのなかで、サンスクリット大学の友人に紹介してもらった Guru-ji は異色だった。その友人はヒマチャラ・プラデーシュ出身で、文化圏はむしろチベットであり、その限り印度人の習癖には全く批判的だった。Guru-ji Miśra 氏を夕方訪れると、ラジオのサンスクリット放送に耳を傾けている。それが終ってから授業がはじまるが、二人の medium は、英語でもヒンディでもなく、自ずとサンスクリットになった。『シャクンターラ』の一場一場を、熱をこめて身振り手振りもまじえて話してくれる。時に花の名が出てくると、一応アマラコーシャをくってから、どんな形のどんな

色のと説明し、ヒンディではこう呼んでいるから街の人にきいてみろ、とサンスクリットでつけ加える。やがて alam で授業が終る。個人教授をしてもらう場合、一流の先生には教授料を払わずとも、二流、三流の先生には払わないと、学習の効果も能率も上がらない、と聞いていた。しかし私は一度も払わなかった。そのためか長続きした授業は少ない。それでもこのミシュラ氏だけは別だった。

雨の六月、カルカッタに移り、残る二ヶ月余りをそこですごした。

Dr. Satya Ranjan Banerjee はカルカッタ大学言語学科の Leader（日本での助教授に相当）である。ラドゥヌンの研究所ですでに二度彼に会っていた。相手に立ち去るすきを与えないためにしゃべる、というほどの話ずきのベンガル人である。尼僧志願の少女たちに、プラークリットの講義にやってきていた。彼女たちは Hemacandra の Vyākaraṇaprākṛta を完全に諳じていて、講義内容も自ずとそこに向った。ベンガル特有の母音をまじえたヒンディー語で授業は行われた。

カルカッタ大学で、Dr. Banerjee に Siddhāntakaumdī の la-kāra の部分を読んでもらったが、これが印度滞在二ヶ年中の最良の授業であった。「ラドゥヌンの朝食は砂を食うのか」と暗にジャイナの禁欲主義者たちを揶揄しながら紹介してくれる彼の学生はことごとく女子学生ばかり。言語学が職に直結しないからとはいえカルカッタまでもがこうであった。カルカッタの女子学生はほとんどサリーを着けている。しかし二年の滞在は、それほどサリーの優美さに驚かせなくしていた。むしろデリーやボンベイの洒落た学生の方にこそ、美しさを見い出すことができた。

ところで彼には数多くの著書論文がある。それをここに少し列記してこの稿を終えることにする。

An Introduction to the Study of Daṇḍin's Kāvyādarśa, Sanskrit Book Depot, Calcutta, 1965; 2nd edn. 1974.

An edition of Vararuci's Prākṛta-prakāśa with a new commentary entitled, Prākṛta-pāda-ṭīkā by Nārāyaṇa Vidyāvinoda together with an introduction, Sanskrit Pustak Bhandar, Calcutta, 1975.

An edition of Siddhānta-kaumudī's Kāraka-prakaraṇa (cases and case-endings) with copious notes, abstracts from other commentaries, and philological explaniatons etc. Sanskrit Book Depot (P) Ltd., Calcutta, 1976.

A Bibliography of Prakrit Language, Sanskrit Book Depot (P) Ltd., Calcutta, 1977.

The Eastern School of Prakrit Grammarians, a Linguistic Study, Vidyasagar Pustak Mandir, 7B College Row, Calcutta, 1977.